

## 手織りを訪ねてラオスへ



首都ビエンチャンでのクラフトフェアの日程が分かったので、それに合わせて昨年10月末のラオス旅行を決めた。

色々な民族の手織りを見てこようというわけである。ラオスという国は、インドシナ半島の内陸山岳国で、本州ほどの国土に640万人が住む多民族国家であるが、私にはなじみの薄い国である。

フェアの会場は珍しい黄色の繭や、特徴ある手織り製品、繭

からの糸紡ぎ・手織の実演など、興味深い展示で一杯。開会セレモニーが終わったばかりだったので、シン(スカート)とパービアン(ラーオ族の正装で、肩に掛けるショール)を着用した人が多くみられ、それぞれの



小学生がシンを着用

美しい織模様をみる事ができた。シンは公務員や生徒に着用の義務があるということで、街中でもOLらしきお嬢さんや、可愛い小学生が着ていた。私はカトウ族のお店で、男性用パービアンを購入。今、テーブルランナーとして使っているが、ビーズが織り込んであるのが特徴で、とても気に入っている。

染織の美術館や工房では、日本ではあまり知られていない天然染料や、質が高く美しい絹の手織り作品にも出会うことが出来た。工業の発達が遅れている分、まだ、野山にあるもので染めて手作りの機で織る文化が健在だった。

買い物をする市民で賑わう市場にも出掛けてみた。中は、入り組んだ狭い通路に雑多な生活用品、食料品などがあふれていた。そこで、藍染めの伝統的模様織りのシン用の布をみつけた。勿論、手織り。なんて美しい模様だろう!! 今年の夏には仕立てて着てみたい。大満足で次は手織り道具の店へ行こうとすると、おばさんが、昼寝していた旦那さんを起こして店番を頼み、わざわざ連れて行ってくれた。こんな具合で、ナイトマーケットの人々も、郵便局を教えてくれた人も、トゥクトゥクの運転手も、みんな穏やかな笑みを浮かべてゆったりと対応してくれた。



伝統の手織り技術



ワット タート・ルアン

世界遺産都市ルアンパバーンに移動。ラオスは仏教国だと思わせてくれる町だった。この小さな町には、華麗な姿のワット(寺院)が沢山ある。寺院は子供達を預かり、その生活と教育をみる役割を担って来たそう。年少の僧がよく見られる所以である。そして、市民は毎朝托鉢の僧に食べ物を供している。未明にホテルを出て、私たちも道端で市民と一緒に座って待っていると、次々と僧たちがやって来る。日本から持参したチョコレートや塩飴を差し出したら、受け取ってくれた。でも、年少の僧達か来る頃には、もうなくなってしまい、もっと沢山持ってくれば良かった...

厳しい生活のなかでも、人々は当たり前のこととして助け合い、落ち着いて生活しているように見受けられた。ラオスは本当に「微笑みの国」だった。

狭山遊系会代表 野本照子(文団連選任理事)

### 編集後記

2度も大雪の異常気象。私の近所でも車庫の崩壊が軒並み。雪国経験のある私は早目に屋根を除雪し、助かった。災害のないと言われる埼玉でも農家の被害は甚大。そんな中での芸術祭うまく外れて助かった。今号の記事をご参照下さい。会員のチームワークが成功の秘訣。桜まつりも満開を祈りたい。(高沢正夫)